



ニンシンの畑



7



さとう あきと
佐藤 昭人さん
昭和 26 年生まれ 市の原

「有機の人」は今号でいったん終了します。ご愛読ありがとうございました。

今から42年前の昭和52年に、旧矢部町で「第3回有機農業全国大会」が開催されるなど、早くから山都町では有機農業が盛んです。この有機農業に関わる「有機の人」を紹介しています。

「信頼でのつながり」

「消費者に支えてもらいました。白菜は、虫食いで「薄い布の」レース」のようにになりました。そんなみずぼらしい野菜でも、買ってもらえたのは救いでした。最初は、手探りで技術ありませんでしたね。」

佐藤さんは、10代から家の農業に従事し、20代前半には、経営を任せられ、米、クリ、シイタケ、葉タバコを生産、牛も飼っていました。22歳の時に、近くの佐藤るい子さん（市の原）から、有機農業の普及を進める団体「全国愛農会」が本部の三重県で行っている、2週間の短期大学（研修）に行くことを勧められます。「当時、毎年冬は、岐阜県の建設会社に『出稼ぎ』に行っていました。そこから帰る時に、寄ることにしたのです。まだ若く、『勉強をしたい、学びたい』という気持ちが強くありました。特に、医者であり、お坊さんであり、農業者でもある梁瀬義亮（やなせぎりょう）先生の



平成 10 年頃 水田の前で 裕子さん 昭人さん

話が印象に残りました。農業を使い始めた頃で、その影響の話を聞き、自分の中にも『何かしたい』というものが出てきたのです。」

それから有機農業を始めたものの、作った野菜の売り先はありませんでした。自分達で市内のあちこちで即売会を

したり、団地をトラックで回って販売先を作りました。

「スピーカーで宣伝をしながら売りました。そのうち、お得意さんが増えてきて、消費者のグループが出来てきました。」

栽培技術も上がり、生産量が多くなること、それまでの直売から、配達へ、そして生協ともつながりができました。

「熊本生協（当時）でも、無農薬の農産物はありませんでした。その頃、周りでは添加物に関する講演会があるなど、有機農業が盛り上がりだしてきていました。消費者は、農薬を使わずに作ったものを求めているのです。」

生産者のグループと消費者のグループでは、常に交流会を行います。消費者が農作業を手伝う「援農」もその一つです。「消費者に生産現場の現状をわかってもらえる「援農」は、自分の励みになりました。期待に込めて、『これはいい物を作ってやらなければならぬ』と思いました。」

冬には、生産者が消費者に会いに行きます。価格を決めるのもお互いに話合いで、理解を求めます。「この価格でないと生産者は生産できない。天候によっては、今はこのような野菜しか出来なかった」と伝えました。そして、それを消費者も理解し、きれいでなくても、揃っていないくても、多少傷があっても買ってもらえました。」

「消費者との距離が近く、顔が見える信頼関係がありました。『おいしい野菜をありがとうございます』と言ってもらったことが、励みになりました。」

信頼による人とのつながりを大事にしてきた佐藤さん。有機農業を始めて、最も近く、そして強いつながりは、奥さんの裕子（ゆうこ）さんとのものです。熊本市に住んでいた裕子さんが、熊本有機農産流通センター（当時）に勤めている時に知り合い、昭和56年に結婚しました。「有機農業を始めた頃は、変わり者扱いでした。しかし、妻は有機農業に理解がありました。子供が育ち盛りの頃は、家計も大変でした。妻にしっかりと支えてもらったからこそ、続けてこられたのです。」



平成 10 年頃 多くの穂をつけたもち米